

発明の名称:近交系マウス及び近交系マウスの作製方法

利用・用途・応用分野

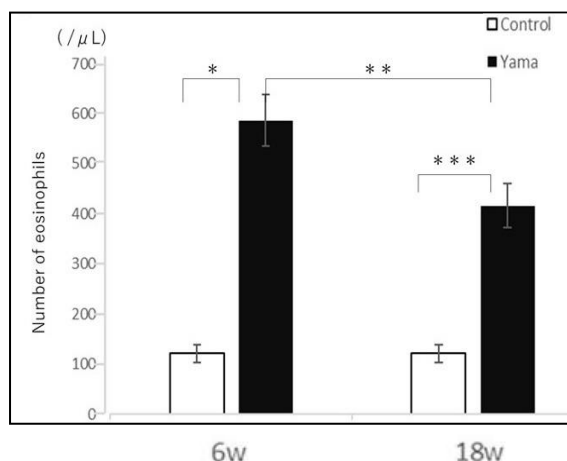
アレルギー研究、肝臓や筋肉の再生医療、免疫機構関連が示唆されている難病指定疾患の基礎的研究

目的・課題

Th2免疫反応が活性化したモデル動物としては寄生虫感染や実験的にサイトカインを制御したモデル動物が用いられているが、従来のTh2免疫反応活性化モデルでは、他のサイトカインの影響や解析の煩雑さにより十分なTh2免疫反応のメカニズム解析ができなかった。そこで、より簡便に好酸球数が増加した近交系マウスを提供することを目的とする。

解決ポイント

- ◆Th2免疫賦活化用組成物を投与した、非近交系マウスを用いTh2免疫反応の活性化の指標として末梢血好酸球数に着目。
- ◆正常の非近交系マウスよりも末梢血中の好酸球数が多い非近交系マウスを数匹見つけた。
- ◆末梢血好酸球数が多い非近交系マウスを用いて近交系マウスを作製したところ、末梢血好酸球数が多いという形質が固定した近交系マウスを得ることができた。
- ◆非近交系マウスを交配して得られた生後6～18週齢で末梢血液中の好酸球数が200/μL以上である近交系マウスを作製する。
- ◆非近交系マウスが非近交系ICRマウスや兄妹交配の第n世代(n=25以上)である近交系マウスであることが好ましい。



※生後6週若しくは18週のYamaマウス及びICR正常対照マウス(コントロールマウス)の心採血により採取した血液中の好酸球数

研究概要・アピールポイント

- ◆末梢血液中の好酸球数が通常の近交系マウスよりも多い近交系マウスや近交系マウスの作製方法に関する。
- ◆本近交系マウスは、好酸球が正常のマウスと比較して高値であることから、好酸球の機能解析が可能となるほか、好酸球が増加したモデル動物として利用できる。
- ◆近交系マウスは、好酸球数が症状の増強に関与すると考えられている疾患、例えば肝硬変、肺腺症又はアトピー症の病害の解明やそれらの疾患に対する薬理効果試験、好酸球増多メカニズムの解明に利用できる。

◆ お問合せ先 ◆

有限会社山口ティール・エル・オー TEL: 0836-22-9768 E-mail:tlojim@yamaguchi-u.ac.jp